

三中だより

令和7年度 1月号



令和8年1月29日発行
荒川区立第三中学校
(学校通信 R7 No.10)
校長 下斗米八穂

ときには 一歩一歩着実に進む たくましさ を
ときには 一気に駆け抜ける しなやかさ を

～ 3学期始業式 校長講話より ～

新年が明けました。皆さん、今年もよろしくお祈りします。

さて、今年は十二支の中の午年です。

私は、馬という動物に、二つの場面からとても馴染みがあります。

一つは、私が小学校に入る前の小さかった頃のことです。

親戚の家には、農作業を手伝う「農耕馬」という馬がいました。今ほど機械化が発達していなかった頃には、太くてたくましい脚で一歩一歩大地を踏みしめて進む農耕馬の力を借りて、畑の固い土を掘り起こしていました。

こちらの私の親戚の家では、人間が暮らす場所と馬が暮らす場所が壁で分けられておらず、一軒の家の中に一緒に生活していました。岩手の「南部曲がり屋」といいます。

ここまでさかのぼると、私の記憶は少し曖昧ですが、「まっこ、まっこ」と声をかけ、家族の一員として馬と暮らしていた老人の顔は、今も心に残っています。（「まっこ」とは「うまっこ」の意味）
馬は、生活を共にする、頼りになる相棒でした。

もう一つは、「競走馬」です。

私が生まれ育った家は、地方の競馬場の縁に建っていました。私は、競馬場の走路に沿って、時折目の前を走る馬を避けながら、幼稚園から高校まで通っていました。

競馬場の朝はいつも早く、夜明け前からトレーニングが始まります。まだ薄暗い時間、「どつと、どつと」と馬の蹄が砂を蹴り上げる足音が静寂の中に響きます。この響きは、いつでも私の身体の中に 圧倒的な力強さでよみがえってきます。

先ほどの農耕馬とは対照的に、競走馬はすらりと長い脚のサラブレッドたちです。張りつめた空気を突き破るように、身をかがめて一気に駆け抜ける姿には、掛値なく見惚れてしまいます。

私にとって、躍動感という言葉はこの競走馬の姿そのものです。

一歩一歩踏みしめて、着実に進む農耕馬。

人と心を通わせて、一気に駆ける競走馬。

この二つのよきを大切にしたい。これが、私の今年の目標です。

ところで、皆さんは、十二支を順に言えますか？

『子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥』の12種類です。

この十二支は、それぞれに動物が当てられています。年賀状や街角で見かける今年の干支と呼ばれる動物たちです。去年はへび年でした。年が変わって、今年がウマ年です。

実は、この十二支、元々は動物ではなくて、植物の成長の様子を順に表していたというのは、聞いたことがありますか？

子年は種の中で生命が芽生え始める段階、丑年は芽が土を押しつけて顔を出そうとしている段階、寅年は太陽の光を浴びて茎がどんどん伸びる段階を表しているというのです。このように聞くと、命の源に関わりたくさんの赤ちゃんを産むネズミ、力強く前に進むウシ、しなやかに跳ぶトラの姿が、自然と重なってきます。

この調子で、十二支を植物の成長になぞらえると、続きの干支はいかがでしょうか。

4番目の卯年は枝葉が茂る段階、活発に活動するウサギの様子です。辰年では、さらに枝葉は伸び盛り、風を受けて大きなうねりを見せます。気力が満ちて昇り続けるリュウの姿が見えてきます。巳年はもっとも草木が成長したピーク、豊かな成長を湛えたへびに落ち着きを感じます。

そして、十二支は今年の午年から折返します。ここから、干支は後半に入って植物は実を結び、次の世代の種を抱く12番目の猪年へと向かいます。

つまり今年の午年は、伸び続ける成長と、その成長の成果を結ぶ実りの時期に向かう変わり目にあたる年だと、私は解釈しました。

このような話を踏まえると、今年の目標をちょっと考えてみたくありませんか？

また、荒川三中の「人間としてかがやく」という教育目標と共通するところがあると思いませんか？

社会に出る皆さんには、中学校を卒業したあとも自分らしく伸びて行ってほしいと思います。そのためにも、この汐入の学び舎で自分を磨き、新しい自分を探し、自分の可能性を伸ばす日々を送っています。その成果は、卒業した後さらに伸び、社会の中で実を結んでいくはずです。

中学校生活は、義務教育と社会をつなぐ、変わり目の節目の時間です。この時間を、皆さんは荒川三中で過ごしています。

改めて考えてみてください。

新しい年を迎え、三学期の始めにあたり、皆さんはどのような思いを抱いていますか？

三学期は、四月から始まる次の新しい環境に向けて、思いを抱く学期です。一年間の学年の締めくくりでもあり、春を迎える心構えを整える時期でもあります。

ゆっくりと構えて、のんびりと考える日があってもいいと思います。

ペースを上げて、集中して取り組む日もあるでしょう。

先の見通しを考える日があるのもいいと思います。

あっという間に過ぎていく時間を捉えて、一日を大切に過ごしてください。



校舎北西角の紅梅と白梅が早くもほころびました。足を止めると、春の香りを楽しむことができます。

《 生徒が考えた 生徒の新しいきまりについて 》

生活指導部主任

1学期、生徒会の意見箱に「黒ソックスを認めてほしい。」という要望が投稿されました。これまで、荒川三中のきまりでは標準服のソックスは「白」と定め、運用をしてきました。

今回の要望を受け、代表生徒である生徒会本部役員は話し合いの時間をもちました。「どうして白なのか」「黒では何が課題になるのか」などを真剣に検討しました。その結果、一部の生徒の希望ではなく、全校生徒でもっと広く考えるべき「学校の在り方」に関わる課題であると捉えて、生活指導部の教員に、学校のきまりの改訂を検討してほしいと申し出をしたのです。

この要望を受けた教員は、生活指導部や運営委員会、職員会議といった会議で、生徒自身がきまりの意義を考える絶好の機会と捉えました。単に教員が許可・不許可を決めるのではなく、生徒主体の議論を進める中で生徒の主体性を育てる方針を決め、経験を通して得る成長を期待して見守ることとしました。

後期に入り、バトンを受けた生徒会本部後期役員は提案内容を整理して、11月の中央委員会の議題として提出しました。中央委員会は、本部役員と専門委員長、全学級委員が月に1回集まって生徒会の活動を話し合ったり、共有したりします。

白の方が標準服に合う、汚れが目立つので清潔に着用ができる、出血した際にすぐに気付くことができる、といった白ソックスの支持。自由に選択をしたい、洗濯の負担が軽くなるといった黒ソックスの支持。双方の利点を並べながら、討議は三中をどのような学校にしたいのか、三中生にふさわしい服装とはどのような姿か、という方向に及びました。議論は単なる色の決定を超え、「三中生にふさわしい姿とは何か」という本質的な問いへと深まっていったのです。

12月の中央委員会で再度深められた内容は一度各学級で伝えられ、学級意見も含めた話し合いが1月の中央委員会で行われました。熟議の結果は再度教員へ届けられ、教員一同もその過程と内容を承認し、このたび「黒ソックスの着用」を認める運びとなりました。

今回の改定は、規制を緩和することだけが目的ではありません。生徒一人ひとりが「なぜこのルールが必要なのか」を考え、自律的に行動する力を養うことを最大の目的としています。

生徒たちは、単にルールの緩和や「自由」を求めるのではなく、集団生活における規律や社会のマナーについて真剣に議論を重ねてきました。生徒には、自分たちで決めたルールだからこそ、自分たちで責任を持って大切にする。そんな「自律」した姿を期待しています。

ご家庭におかれましても、今回の改定の趣旨をご理解いただき、お子様が自ら判断し責任ある行動がとれるよう、温かく見守り、お声がけいただけますと幸いです。

なお、具体的な運用ルールは以下の通りです。1月19日(月)の生徒会朝礼で、生徒会長から全校生徒に伝えられました。ご家庭のご理解とご協力をお願いいたします。

【 運用開始日 】 令和8年2月2日(月) から

【 変更内容 】 標準服着用時、ソックスは黒または白とする。

【 黒ソックス着用の注意点 】 …これまでの白ソックスと同様です。

無地のものを着用する (ワンポイント不可)

くるぶしより上に十分な長さのあるものを着用する。

※ 卒業式・始業式などの式典のときは、
これまで通り「白ソックス」統一とします。



学校ホームページも
ご覧ください。